

# パスカル『プロヴァンシアルの手紙』\*

—「フランス・ジャーナリズム文学の傑作」—

森 川 甫\*\*

- 1) パンフレット、『プロヴァンシアルの手紙』<sup>1)</sup>の出現
- 2) 『第1の手紙』
- 3) 「近接能力追跡劇」
- 4) 「蓋然論の教え」批判
- 5) イエズス会の反応
- 6) 読者層 —サロンの教養人—

## 1) 『プロヴァンシアルの手紙』の出現

恩寵と道徳に関する論争文書、『プロヴァンシアルの手紙』は、1656年1月から1657年3月までの1年余りの期間に、18通の手紙の形でパリで出版されたパンフレットである。大部分の「手紙」は、1枚の紙の4つ折判8ページで、「第16の手紙」と「第18の手紙」だけは、1枚半の紙の4つ折判12ページで構成されている。表紙はなく、冒頭に、表題と日付が下記のごとく載せられている。

LETTRE

ESCRITE A VN PROVINCIAL

PAR VN DE SES AMIS

SVR LE SVJET DES DISPVTES presentes de la Sorbonne.

De Paris ce 23. Januier 1656

「ソルボンヌで現在論議されている問題に関して、ある人から田舎の友に宛てて書かれた手紙  
パリにて、1656年1月23日」

初版本には著者の名前も、差出人の名前もなく、匿名であるが、1657年版には「モンタルト」という偽名が用いられている。『第3の手紙』の末尾には、

Vostre tres-humble, & tres-obeissant serviteur,  
E.A.A.B.P.A.F.D.E.P.

「心からへりくだり、従順なあなたのしもべ、E.  
A.A.B.P.A.F.D.E.P.」

という署名がある。

E.A.A.B.P.A.F.D.E.P.は、Et Ancien Ami Blaise Pascal Auvergnat Fils d'Etienne Pascal あなたの旧友、オーベルニュ出身者、また、エチエンヌ・パスカルの息子であるブレーズ・パスカル」とする説と、最初のE.A.A.をEt Antoine Arnauld (そして、アントワヌ・アルノー)と解き、最後にあったのを前に置いたとする説があるが、コニユエはじめ、多くの研究者は前者を採用している<sup>2)</sup>。

ジェズイットのラパン神父によれば、「小さな手紙」<sup>3)</sup>はまず、サロンで発表され、次いで、発売されると、すぐに売り切れた<sup>4)</sup>。

主として、パリで、ポール・ロワイヤル修道院に味方する印刷業者がコピーを作成、地方へ、さ

\*キーワード：パスカル、PR文書、表現

\*\*関西学院大学社会学部教授

1) Pascal (Blaises), *LETTRE A VN PROVINCIAL*, *Edition princeps*, 1656—1657.

*Œuvres de Pascal* du MM. Léon Brunschvicg, Pierre Boutroux et Félix Gazier, tomes IV, V, VI, VII, in 8° (Paris, Hachette, *Les Grands Ecrivains de la France*, 1914—1926)を用いる。略号GE.

2) Cf. *OCL*, p. 52

3) *Les Lettres Provinciales* (『プロヴァンシアルの手紙』)の日本語題名は、状況を考慮して『小さな手紙』『田舎の友に宛てた手紙』『プロヴァンシアルの手紙』を与えている。*Petites Lettres* (『小さな手紙』)は論争初期に用いられた呼び名で、やがて*Les Lettres Provinciales* (『プロヴァンシアルの手紙』)が定着してくる。

4) R. P. Rapin, *Mémoires*, II, pp. 367—369.

らに、「イギリス、オランダ、スイス、ドイツ、また、ローマ教皇にほとんど好意を持たない国」<sup>5)</sup>に送られた。この『小さな手紙』にかかわると、逮捕される危険があった。事実、逮捕され投獄された印刷業者もあった。もっとも危険なのは、筆者のパスカル自身であったが、官憲は作者を特定することができなかった。パスカルが著者だということが分かったのは、やっと1659年のことである。この『小さな手紙』は何の予告もなく、また、大きな人気があったにもかかわらず、『第18の手紙』で終わっている。パスカルは『第19の手紙』も書き始めていた。執筆をやめたことに関しては彼はなにも述べていないが、その理由は容易に推測できる。1657年3月、エックス・アン・プロヴァンスの議会が『第17の手紙』を焼くことを命じている<sup>6)</sup>。1657年3月11日には教皇アレキサンドル7世が禁止の勅令をルイ14世に送っている<sup>7)</sup>。『第19の手紙』執筆時に、外部からの圧迫が激しかったことがうかがえる。ジャンセニウス擁護が教皇や国王の否定につながるようになったのである。パスカルには教皇を否定することはできない。しかし、彼はジェズイットとの戦いを止めたわけではなかった。彼は次の手段を採ることになる。

## 2) 『第1の手紙』

「フランス・ジャーナリズム文学の傑作」と評されているパスカルの『プロヴァンシアルの手紙』は、その書名のごとく、手紙の形態を採っているとともに、対話や劇の形式で書かれている。また、彼が『幾何学的精神について』において叙述している説得術、つまり、「説き伏せる術」と「気に入る術」を見事に駆使している。以下、『第1の手紙』の導入部、「近接能力追跡」劇、「蓋然論の教え」により例示する。

『第1の手紙』から『第10の手紙』では、ポールロワイヤル修道院の神学者、アントワヌ・アルノーに対する譴責やジェズイットの良心例学の適応例についての情報の提供がなされている。アル

ノーに対する非難、譴責が伝えられ、権威あるとされているソルボンヌ大学神学部では大勢の博士、修道士が集まって会議を開いている。いったい何が起きているのか。この疑問に『プロヴァンシアルの手紙』の著者は答えようとして、この「手紙」を執筆する。『第1の手紙』の冒頭でこの意図を明らかにしている。

「僕たちは、まんまとだまされていたんだよ。やっとな昨日になって、僕も迷いからさめたというわけだ。それまでは、ソルボンヌで論議されるほどの問題なら非常に重要で、信仰上も絶対ゆるがせにできぬものとはばかり思っていたんだ。パリ大学神学部のような名門大学であんなにたびたび会議が持たれ、そこでは、めったに例のない異常な出来事がなんども起こったというんだから、これはもう尋常ふつうではない重大問題が議せられているに違いないと信じないでいられないじゃないか。ところがだよ、これから話すように、これほどの大騒ぎの結果がどういうことになったかを知ったら、きっと、君も驚くだろうよ。僕は、その完全な情報を手に入れたから、ひとつそれをごくかいつまんで、君にも知らせておきたいと思うのだ。」(『第1の手紙』)<sup>8)</sup>

冒頭のこの有名な文章は、まず第1に、『プロヴァンシアル』論争の幕開けを告げており、第2に、いかなる論争が起きているのかと、読者の興味を一挙に引きつける名文であり、第3に、重要な教義に関係があることを予感させる。

また、『第1の手紙』の末尾にも、「これからも事件の経緯をいちいち詳しくお知らせすることにしよう」と述べて、情報提供の意図を明かにしている。この『手紙』の提供している情報の内容は、審議されている2つの問題である。すなわち、事実に関する問題と法に関する問題である。

事実に関する問題というのは、アルノーが、その『ある貴族への第2の手紙』で、次のように言ったのは傲慢無礼であるかどうかを明らかにしたいということである。つまり、アルノーはこう言っ

5) 『1656年度フランス管区年次報告書』 Cf. 脚注36)

6) *GE*, VI, pp. 377-378.

7) *GE*, VII, p. 3.

8) *1re Lettre*, p. 1. *PC*, pp. 3-4. cf. 『P 著作集』 III, p. 9. *Lettre* は初版本を表している。

た。

「自分は、ジャンセニウスのその本を、きちんと正確に読んだ。しかし、その中には、前教皇が断罪なさったような命題は見つからなかった。むろん、自分としても、もしどこかでそのような命題に行き当れば、断罪するに決まっている。ジャンセニウスの中に見つかったとしても、同じことだ」(『第1の手紙』)<sup>9)</sup>

と。アルノーを非難する勢力は、それらの命題が、ジャンセニウスの『アウグスティヌス』の中にあると教皇の勅書に明言されているにもかかわらず、アルノーが、ジャンセニウスのものかどうか分からないというような表現をするのは傲慢無礼ではないかというのである。

事実問題について情報を提供した後、『プロヴァンシアルの手紙』の著者、モンタルト<sup>10)</sup>は、この問題について、感想を述べている。

「事実に関する問題は、だいたい以上のような結果に落ち着いたわけだが、この点については、僕はそれほど不安は感じていないんだ。だって、アルノーさんが傲慢無礼であろうと、なかろうと、そんなことは僕の良心には関係がないんだからね。それに、ふっと気が向いて、あの命題は本当にジャンセニウスの中にあるのか調べてみたいという気になれば、あの本は、それほど珍書でもなく、大冊でもないんだから、いちいちソルボンヌにお伺いをたてなくたって、自分で全部に目を通し、疑問を晴らすこともできるんだからね。」(『第1の手紙』)<sup>11)</sup>

ソルボンヌで審議されている第2の問題は、法的問題である。法的問題に関して、議論の中心になっているのは、アルノーが同じ手紙の中で述べていること、つまり、「聖ペトロは、罪に陥ちたとき、何かを果たすのに欠かせぬ恩寵を欠いていた」という言葉である。モンタルトは法問題について感想を述べる。

「この点、僕たちはすっかりだまされていたというわけだ。君も、僕も、恩寵に関するもっとも重要な原則、たとえば、恩寵はすべての人に与えられているとは限らないのかとか、恩寵は有効であるのかとかいったふうな問題が審議されつつあると思ひこんでいたんだから。僕は、わずかな期間に大神学者になったよ。これから、その幾つかの証拠をお見せしよう。」(『第1の手紙』)<sup>12)</sup>

### 3) 「近接能力」追跡劇

『第1の手紙』は、傑作『プロヴァンシアルの手紙』のなかの傑作である。この手紙は劇の形式をとって、「ソルボンヌで現在論議されている問題」を観客に知らせる。真相究明のため、「僕」は、次々と関係者を訪問し、やがて、意味不明の「近接能力」という言葉が鍵になっていることを知る。劇作家モンタルトは「近接能力」の意味を追求する。この劇はいわば、「近接能力」追跡劇である。まず第一に、ことの真相を知るため、まず、「ナヴァール学寮のスコーラ学者」を訪ねる。つまり、アンチ・ジャンセニストの意見を聴く。

「ことの真相を知ろうとして、僕はナヴァール学寮のスコーラ学者のある先生に会いに行ったんだ。その先生は、ぼくの家の近所に住んでいて、君も知ってのとおり、ジャンセニスト反対派の急先鋒のひとりだ。」(『第1の手紙』)<sup>13)</sup>

「ナヴァール学寮のスコーラ学者のある先生」から、説明を得てから次いで、「ジャンセニストのある先生」を訪問する。

「その後、事件の核心がつかめたと思うととてもいい気になって、ある人のところに出かけたのだ。その人はますますお達者で、ご自分の義理の弟さんのところへ連れて行ってやろうとおしゃるくらいのお元気さだった。その弟さんというの

9) *1re Lettre*, p. 1. PC, pp. 4–5. cf. 『P 著作集』 III, pp. 9–10.

10) 『プロヴァンシアルの手紙』の著者、ブレーズ・パスカルの筆名である。1657年3月、合本が出版されるが、その題名にあらわれる。

*Les Provinciales ou les lettres écrites par Louis de Montalte un Provincial de ses amis et aux RR. PP. Jésuites, sur le sujet de la morale et de la politique de ces Pères.* Cologne, 1657.

11) *1re Lettre*, p. 2. PC, p. 7. cf. 『P 著作集』 III, p. 11.

12) *1re Lettre*, pp. 2–3. PC, p. 8. cf. 『P 著作集』 III, p. 12.

13) *1re Lettre*, PC, p. 8. cf. 『P 著作集』 III, p. 12.

が、そうざらにないパリパリのジャンセニストなんだが、なかなか気のいい人物でもあるんだ。」(『第1の手紙』)<sup>14)</sup>

再び、「ナヴァール学寮のスコラ学者」の先生のところへ僕も、すっかり安心し、初めの先生のところへ戻って、さもうれしそうに、ソルボンヌにもまもなく、平和が訪れますよ、間違いありませんと、告げたわけさ。つまり、ジャンセニストたちも、義人がおきてを果たす能力を持つという点では同じ意見だし、この点は請け合ってもいいし、場合によっては血の署名をさせてもいいといったんだ。」(『第1の手紙』)<sup>15)</sup>

「ナヴァール学寮のスコラ学者」の先生から「近接能力」という「今まで聞いたこともない言葉を聴き、もう一度、「ジャンセニストのある人」を訪ねる。僕には、ちょっとやさそとで理解できそうにない言葉なんだからね。そして、忘れないうちにと、急いでさっきのジャンセニストの知人にまた会いに行き、挨拶を交わすなりすぐ、こう切り出したんだ。」(『第1の手紙』)<sup>16)</sup>

「ジャンセニストの知人」から、自分で確かめるよう勧められる。「ご自分で直接あの人達からお聞きになったほうが確かでしょう。私から紹介しましょう。ル・モワヌさんとニコライ神父とに別々にお会いになってみるだけでいい。」(『第1の手紙』)<sup>17)</sup>

まず、モリニスムに同調する「ル・モワヌさんの一人のお弟子さん」を訪れる。

「ジャンセニストの知人」があげた名前のなかに、やはり僕の知っている人が何人かいた。そこで、僕はこの忠言を得たのをしおに、いいかげんにこの問題から足を洗おうと決心し、先生の家を出ると、まず、ル・モワヌさんの一人のお弟子さんのところへ行った。」(『第1の手紙』)<sup>18)</sup>

そこで、「義人たちは、神に助けを祈り求める

のに必要なすべてのものを持っていて、祈りのために新しい恩寵を全然必要としない」という意見であることを知る。

次に、新トミストの「ドミニコ会士」を訪れる。時間をむだにしないようにと、僕は、ドミニコ会士たちのところへ急ぎ、かねて承知の新トミストとされている人たちに問いかけた。「第1の手紙」<sup>19)</sup>

新トミストとジェズイットは、主張が異なるにもかかわらず、「近接能力」という意味不明瞭な言葉を用いることによって一致していることを知る。モンタルトは叫ぶ。

「何ですって、神父さまがた。それは、言葉の上のごまかしじゃありませんか。言っている意味は反対でも、共通の言葉さえ使っていれば同意見だなんておっしゃるのは。」(『第1の手紙』)<sup>20)</sup>

そこへ、「ル・モワヌのお弟子さん」が登場する。

「神父さんたちは、黙ってしまって、ウンともスンともいわないのさ。そこへ、また、うまい具合に、先のル・モワヌさんのお弟子さんというのがやって来た。この偶然には僕も驚いたものだが、あとになって、連中はひんぱんに会っていて、ずっとなれあい関係だったことがわかった。」(『第1の手紙』)<sup>21)</sup>

モンタルトは、「ドミニコ会士」と「ル・モワヌのお弟子さん」の意見の相違点をつき、説明を求めると、「ドミニコ会士」の一人が、説明しようとする。「ル・モワヌのお弟子さん」はただちに、それを押し止めていう。あなたがたは例のごとく<sup>22)</sup>を蒸し返そうとなさるんですか。私どもは、その<近接能力>という語の説明はしないこと、それがどういう意味かは明らかにせず、双方ともがこの語を使うことで一致していたんで

14) *1re Lettre, PC*, p. 10. cf. 『P 著作集』 III, p. 13.

15) *1re Lettre, PC*, p. 11. cf. 『P 著作集』 III, p. 14.

16) *1re Lettre, PC*, p. 12. cf. 『P 著作集』 III, p. 15.

17) *PC*, pp. 13-14. cf. 『P 著作集』 III, p. 17.

18) *1re Lettre, PC*, p. 14. cf. 『P 著作集』 III, p. 17.

19) *1re Lettre, PC*, p. 16. cf. 『P 著作集』 III, p. 18.

20) *1re Lettre, PC*, p. 17. cf. 『P 著作集』 III, pp. 19-20.

21) *1re Lettre, PC*, p. 17. cf. 『P 著作集』 III, p. 20.

22) ローマ教皇庁はジェズイットとドミニカンをローマに召集し、1597年から1607年にかけて「恩寵の効果と自由意志に関する」会議を開催した。この会議は何ら積極的な結論を得ないまま終わってしまった。

はないんですか。」(『第1の手紙』)<sup>23)</sup>

最後に、モンタルトが断定する。

「神父さまがたに申し上げます。本当を言えば、こういうことはすべて、まったくのごまかしじゃあないかと思わずにられないのです。ですから、会議で何をお決めになり、譴責という手段をお出しになっても、ついに平和は実現しないでしょう。予言してよろしいですよ。(…)ソルボンヌの権威にとっても、神学の権威にとってもふさわしいこととは言えませんねえ。(『第1の手紙』)<sup>24)</sup>

この「近接能力追跡劇」は、舞台は次のようになり、『プロヴァンシアルの手紙』の読者にとっては非常に身近かなものであったであろうと思われる。

舞台 カルチエ・ラタン

第1景 ナヴァール学寮

第2景 カルチエ・ラタンのなか「急いでさっきのジャンセニストの先生のところへ」

第3景 ナヴァール学寮<sup>25)</sup>

第4景 ジャンセニストのところ

第5景 ジャコバンの僧院<sup>26)</sup>

作者 演出 パスカル

彼は、舞台脇から、つまり、カルチエ・ラタンのすぐ近く<sup>27)</sup>から見ている

「その言葉を使いさえすればよい。そうでなければ、異端になる。」ルモワヌの弟子たちは、「私どもの方が、多数ですからね。必要とあれば、フランシスコ会の方からも、私どもが勝つのに十分な修道士を動員してきますからね」という。(Cf. 『第1の手紙』)<sup>28)</sup>

つまり、「近接能力」という語は、多数派工作のための手段であることをモンタルトは暴いてい

る。

#### 4) 蓋然論の教え

ニコルは『第5の手紙』に次のような副題をつけている。「新しい道徳を打ち立てようとするジェズイットの意図。彼らのなかの2種類の良心例学者。締めりのない者が多く、厳しい者は少ない。この違いの理由。蓋然性の教えの説明。教父たちになり代わろうとする、知られざる、一群の作家たち」<sup>29)</sup>。モンタルトは書簡の形式と対話を用いて、良心例学者の中心的な教えを揶揄して、読者の笑いを誘いつつ、非難している。

モンタルトは友達からの情報を伝える。ジェズイットは自分たちがいたところで信用を勝ちとり、すべての人の心を自由に操れるようになるのが、宗教のためにも有用だし、ぜひそうすべきだと信じこんでいる。そして、ある種の人々を支配するには、福音書の厳格な戒めをもってするとうまく行くので、そうするのが好都合と見たときにはそれを利用する。だが、大多数の人たちにとってこの定めは意に背くものだから、その人たち向けには使わない。こんなふうには、誰をも満足させるものを準備している。このようなわけで、彼らは、身分も種々雑多、国籍もずいぶん異なった人たちを相手にするに当たって、それぞれの違いに応じた良心例学者を何人も準備しておかねばならないことになる。(Cf. 『第5の手紙』)<sup>30)</sup>

友達は言う。「さあ、これでやつらが、その<蓋然的教え>のおかげで世界中に広まった次第が良く分かっただろう。この教えこそは、今まで述べてきたあらゆる乱脈の源であり、その根なのだ。君はこのことをぜひともやつら自身からじきじき聞きだしてみるといいよ。やつらは誰にも隠

23) *1re Lettre, PC*, p. 18. cf. 『P 著作集』 III, p. 21.

24) *1re Lettre, PC*, p. 18. cf. 『P 著作集』 III, p. 21.

25) 元 *Ecole Polytechnique*, 現在、*Ministère de la Recherche et de la Technologie, Collège Internationale de Philosophie* 所在地。Rue Descartes, Paris (V<sup>e</sup>).

26) 現在の *rue Saint-Jacques, Paris* (V<sup>e</sup>).

27) *rue des Franc-Bourgeois, faubourg Saint-Michel*, 現在、45, *rue Monsieur-le-Prince, Paris* (VI<sup>e</sup>).

28) *1re Lettre*, p. 8. *PC*, p. 19. cf. 『P 著作集』 III, p. 22.

29) *PC*, p. 72. ピエール・ニコル *Pierre Nicole* はポール・ロワイヤルの神学者であり、『プロヴァンシアルの手紙』作成の協力者。

30) *5e Lettre*, p. 2. *PC*, p. 75. cf. 『P 著作集』 III, p. 93.

しだてはしないさ。今きみに話したことも全部言ってくれるだろうよ。ただし、人間的、政策的抜け目のなさを神のための、キリスト教的な賢明さなのだと言いつくろってごまかす点は違うだろうがね。」(『第5の手紙』)<sup>31)</sup>

この『第5の手紙』のなかで、モンタルトは中国における偶像崇拜の問題を採り上げている。

「どんな種類の人にも用意された証拠があるんだな。何をたずねてこられても、ちゃんと巧みに答えができていくんだ。だから、十字架にかけられた神を愚かだと思える国に行けば、十字架のつまづきは取り去り、ただ栄光のイエス・キリストだけを宣べ伝え、苦難のイエス・キリストは宣べ伝ええないのだ。インドやシナでのやつらのやり口もその一例さ。やつらは、偶像礼拝も許していたんだよ。そのために案出していた巧妙な策略はこうさ。着物の下にイエス・キリストのみ像を隠しておいて、外向きには、シナ人の神、天帝や孔子を礼拝すると見せて、心のなかではこのみ像をあがめていると思うようにすればよいと教えているんだな。」(『第5の手紙』)<sup>32)</sup>

シナにおける偶像問題についてのモンタルトの非難に対しては、ジェズイットはほとんど答えていない。当面、蓋然的意見の弁護が最大の問題であったので、偶像崇拜問題という明白な問題に答える余裕がなかったのであろう。

今まで誰も知らないような、まったく愛の欠けたキリスト教的道徳や、驚くほど多くの罪が取り繕いされ、多くの自堕落が見過ごされているのを指摘したのち、モンタルトは、「それを見たら、君はもう、やつらが、自分たちが理解するような信仰生活を送るのに十分な恩寵を、すべての人が、つねに持っている」と主張するのが不思議とは思わないだろう。やつらの道徳ときたら、まったく異教的なんだから、生まれながらの本性があれば、それをおこなうのに結構足りるんだ」と、ジェズイットの道徳の異教性を指摘している。(Cf. 『第5の手紙』)<sup>33)</sup>

良心例学者の「蓋然論の教え」を断食に適用す

るイエズス会の「神父さん」を皮肉をこめて揶揄する。

寛大な神父に断食を守ることがなかなかできないと打ち明けると、

「そら、ここですよ。『夕食を食べなければ眠れない者は、断食する義務があるか。全然ない』さあ、これで御満足でしょうが。」「すっかりというわけじゃありません」と、僕。「僕は、朝は軽く食事をし、夕方に本式の食事をすれば、断食に耐えられるのですがね。」「それじゃあ、次を御覧なさい」と、彼は言った。「神父がたは、すべてに抜かりがありません。『夕方に本式の食事をし、朝は軽い食事にしておけるならば、どうか』」「なるほど。」「『この場合も断食はしなくてもよい。食事の順序を変更する義務はだれにもないからである』。」「ああ、何とまあ、すばらしい理由なんでしょう」と、僕は叫んだ。「ところで、と彼はつづけて言った。「お聞きしたいんですが、あなたは、ぶどう酒はかなりいける口ですかな。」「いや、神父さん、そんなにはいけないです」と僕は答えた。「それをお聞きしたのは」と、彼は返した。「午前中なら、いつでも、飲みたいときにお飲みになっても、断食を破ることにならないのをお知らせしておきたかったです。(…)断食を破らずに、『望みの時間に、しかも大量のぶどう酒を飲むことができるか。できる。イポクラス酒でもよい』イポクラス酒のことは私も思いつきませんでしたな」と、彼はつけ加えたものだ。(『第5の手紙』)<sup>34)</sup>

これらの対話のなかで用いられている相手をけなす手段のうち、もっとも重要なものは、皮肉である。モンタルトはジェズイットに対してはマスクをつけているが、読者には顔を見せている状況のなかで、皮肉は滑稽さの効果を生み出す。「皮肉と滑稽さは密接に関連している。このそれぞれは、外観と実態を同時に知って気づくことによる。このそれぞれは知的な判断を要求する。批判の道具であるこのそれぞれは、また、明らかに風刺の道具でもある。皮肉のさまざまな形態を集中

31) 5<sup>e</sup> Lettre, p. 3. PC, p. 78. cf. Réponses, pp. 182-184. 『P 著作集』 III, p. 95.

32) 5<sup>e</sup> Lettre, p. 2. PC, pp. 76-77. cf. 『P 著作集』 III, p. 94-95.

33) 5<sup>e</sup> Lettre, p. 3. PC, p. 78. cf. 『P 著作集』 III, p. 96.

34) 5<sup>e</sup> Lettre, PC, pp. 81-82. cf. 『P 著作集』 III, pp. 98-99.

的に、また、入念に用いて、風刺作家パスカルはジェズイットを餌にして、読者とともに笑うのである」<sup>35)</sup>。

### 5) イエズス会の反応 —『1656年度フランス管区年次報告書』<sup>36)</sup>—

『プロヴァンシアルの手紙』において表わされたジャンセニストとその論敵のジェズイットの姿は、これをまとめれば次のようになるであろう。ジャンセニストは、その教義においても、その道徳的生活においても統一性があるのに対し、ジェズイットは、多様である。ジャンセニストの表現は明晰、また、率直であるが、ジェズイットは、不明瞭で、誇張がある。ジャンセニストは読者を信用して、真実を読者に訴えているが、ジェズイットは読者を信用せず、問題を専門の聖職者にのみとどめようとする。ジャンセニストは伝統的権威、永遠の真理を求め、ジェズイットは自ら新しい権威になろうとし、真理は変わりうるものとしている。ジャンセニストは聖書の道徳律法を絶対的な道徳とするが、ジェズイットにとっては、倫理は人間を取り巻く状況によって変わりうるものである。それゆえ、聖書に立ち戻って、キリスト教の立場から判断すれば、ジャンセニストは宗教の根源的な教えに適合しており、ジェズイットは、逆に、適合していない。それゆえ、伝統的なキリスト教、聖書的なキリスト教の観点からいえば、ジャンセニストは正統的であり、ジェズイットは、異端となる。

実際には、地理的世界の拡大、近代科学の誕生という時代の変動期に、ジャンセニストは永遠の真理、伝統的なキリスト教の信仰を固く守り、求め続けようとした伝統派であるのに対し、ジェズイットは、新しい時代への適応に努力した近代派であろうが、『プロヴァンシアルの手紙』側から

の論理的な帰結からいえば、上記のように要約できるであろう。ジャンセニストに対する迫害が一層強くなり、ついには、ポール・ロワイヤル修道院の廃止にまでいたるが、『プロヴァンシアルの手紙』が非常に多くの読者を得、共感をもって読まれたことは否定できない。そして、ジェズイットはこの『プロヴァンシアルの手紙』によって、とりわけ、その道徳の教えは大打撃を受けることになる。

この『プロヴァンシアルの手紙』に関するジェズイット側の評価はどうであろうか。たとえば、同時代のラバン神父の証言とか、少し後年のダニエル神父 (*Entretiens de Cléandre et d'Eudoxe* 『クレアンドルとユードックスの対談』の著者) の評価とか、個人としての証言、評価はあるが、イエズス会の公式報告は伝えられていなかった。本論文では、われわれはフランスからローマのイエズス会本部への公式の年次報告書にもとづいて、『プロヴァンシアルの手紙』に関するジェズイット側の評価を調べた。

公式の年次報告文書は、「今日まで、少なくとも、フランスにおいては知られていなかった」(ジャン・メナル *Jean Mesnard* 教授の評言) が、われわれはその文書が ARCHIVUM ROMANUM SOCIETATIS IESU (イエズス会古文書館) に存在することを発見した。その報告書は次のとおりである。

—*Annuae Litterae Prouinciæ Franciæ Ad annum Christi 1656, Roma, ARCHIVUM ROMANUM SOCIETATIS IESU, 6 feuilles (12 p).*

この『年次報告書』*Annuae Litterae* のなかに、『プロヴァンシアルの手紙』に関する記述を発見した。

35) Patricia Toplis, *The Rhetoric of Pascal*, p. 77.

36) MORIKAWA, Hajime, 「*Annuae Litterae Prouinciæ Franciæ Ad annum Christi 1656* —パスカルの『プロヴァンシアルの手紙』に関連して—」『社会学部紀要』第63号 関西学院大学 1991.

—*Annuae Litterae Prouinciæ Franciæ Ad annum Christi 1656, -concernant Les Lettres Provinciales de Blaise Pascal-*, *Etudes de Langue et Littérature Françaises* N° 60, 1992

—*Annuae Litterae Prouinciæ Franciæ Ad annum Christi 1656* とパスカルの『プロヴァンシアルの手紙』『ガリア』XXXI, 大阪大学フランス語フランス文学会 1992

—*LES LETTRES PROVINCIALES DE BLAISE PASCAL ET ANNUE LITTERAE PROUINCIAE FRANCIAE AD ANNUM CHRISTI 1656*, *Kwansei Gakuin Annual Studies*, Vol. XLIII, 1994.

Jansenianorum in Societatem odium  
& persecutiones

Janseniani Summi Pontificis afflati fulminibus; atque Hæreseos conuicti, non ut olim Lutherus, & Calvinus, in Pontificem, & Romanam Ecclesiam malevolentiae, & furoris sui effudere virus, sed in Societatem nostram, cuius doctrinam de moribus maledicentissimis, & dicacissimis Epistolis traducere conati sunt. Eas autem tanto numero sparserunt, ut constet intra tres menses earum ad centum viginti millia exemplarium e diversis prælis prodiisse, qua per emissarios suos, non per vniuersam Galliam modo, sed & in Angliam, Batauiam, Heluetios, Germaniam; aliasque gentes in Romanam Sedem parum æquas deferenda curarunt. Eas porro contempsimus quamdiu hæreticorum & impiorum prolixis animis excipi vidimus: at vbi sensimus iisdem etiam, tentari bonorum fidem, & patientiam nostram modestamque taciturnitatem incommodare religioni: Contrariis litteris didaculorum hominum ita contudimus impetum & audaciam vt omnes intellexerint, nec Innocentiam nobis nec veram doctrinam defuisse.

イエズス会に対するジャンсениストの憎悪と迫害

ローマ教皇の雷に打たれた明白な異端であるジャンсениストたちは、かつてのルターやカルヴァンの如くローマ教会の教皇に対して彼らの毒をまき散らす代わりに、イエズス会に歯向かってきた。彼らはイエズス会の道徳を、中傷と嘲笑とに満ちた彼らの手紙のなかで歪曲した。そして、これらの手紙は、非常に数多くまき散らされた。というのは、彼らはあきらかに3ヵ月間に、さまざまな印刷機を用いて約12万部の手紙を発行した。そして、これらの手紙は、フランス全体、イギリス、オランダ、スイス、ドイツ、また、ローマ教皇にほとんど好意を持たない他の国の人々にも広がった。さらにまた、私たちは、異端と不敬虔で動揺する精神の持ち主によって歓迎されてい

るのを見ている限りは、これらの手紙を軽蔑して見過ごしてきた。しかし、これらの手紙によって、善意の人々の信仰が脅かされ、私たちの忍耐と謙虚な沈黙によって宗教が損なわれることがわかった。ただちに、私たちが純粹さや真の教理に欠けるものでなかったことをすべての人々が理解するように、[これらの手紙の] 激しく、そして、ずうずうしい嘲笑を撃退した。

『年次報告書』の解釈

「イエズス会の道徳を中傷と嘲笑とに満ちた彼らの手紙のなかで歪曲した」。『プロヴァンシアルの手紙』はジェズイットの道徳と共に、恩寵問題も採り上げているが、この『年次報告書』の記述では、道徳に関してのみ言及している。パスカルの、ジェズイットの道徳に対する非難、攻撃に大きな痛手を感じていたのであろう。

「これらの手紙は、非常に数多くまき散らされた。というのは、彼らはあきらかに3ヵ月間に、さまざまな印刷機を用いて約12万部の手紙を発行した」。

「3ヵ月間に」という期間に、『プロヴァンシアルの手紙』のどの手紙が関係するであろうか。『第13の手紙』が1656年9月30日、『第14の手紙』が10月23日、『第15の手紙』が11月25日、『第16の手紙』が12月4日、『第17の手紙』が1657年1月23日の日付となっているから、この『年次報告書』が12月末日に書かれたとすると、『第14の手紙』から『第16の手紙』までの3通、『第13の手紙』を含めたとしても、4通の手紙が該当するであろう。この3～4通の手紙が「約12万部」発行されたと報告されている。サン・ジル Saint-Gilles によれば『第17の手紙』は1万部印刷されている<sup>37)</sup>。この数字と比較すると、3～4通の手紙が「約12万部」ということは、各手紙それぞれ3～4万部ということになり、発行部数が非常に多く報告されているのは、実際にそうだったとしても、あるいは、誇張しているとしても興味ある表現である。「約12万部」というのは、驚きと不安の表れでもあろう。

「これらの手紙は、フランス全体、イギリス、

37) Cf. PC, p. 327.

オランダ、スイス、ドイツ、また、ローマ教皇にほとんど好意を持たない他の国の人々にも広がった」。

パリで読まれ、フランス国内にも送られたというのがこれまでの通説であるが、この「年次報告書」によればヨーロッパ各国に送られていたことになる。「異端と不敬虔で動揺する精神の持ち主によって歓迎されているのを見ている限りは、これらの手紙を軽蔑して見過ごしてきた。しかし、これらの手紙によって、善意の人々の信仰が脅かされ、私たちの忍耐と謙虚な沈黙によって宗教が損なわれることがわかるとただちに、私たちが純粋さや真の教理に欠けるものでなかったことをすべての人々が理解するように、[これらの手紙]の激しく、そして、ずうずうしい嘲笑を撃退した」。

この記述は、『プロヴァンシアルの手紙』の初期の頃には、ジェズイットの反論文書はほとんど現われなかったが、やがて現われるようになる論争の経過と合致する。

これらの記述の表題は、「イエズス会に対するジャンセニストの憎悪と迫害」である。迫害されているのは、ジャンセニストのはずであるが、この記述では、ジャンセニストがジェズイットを「迫害」していることになる。

この「迫害」と、さきに挙げた「3ヵ月間に、約12万部の手紙を発行」されたこと、「イギリス、オランダ、スイス、ドイツ」その他、ヨーロッパ各国へ送られたと記述していることは、パスカルの『プロヴァンシアルの手紙』を痛烈な非難攻撃としてジェズイットが受け止めている表われであろう。

## 6) 読者層 — サロンの教養人

ルターやカルヴァンの宗教改革運動に対して、ローマ教会はその精神と伝統によって、教会刷新に努めている。宗教改革と教会刷新の動きは、1世紀以上、キリスト教国をめぐることになる。カルヴァン派の非妥協に対して、ローマ教会は硬化する。ローマ教皇はトレント公会議を召集して、教会の刷新を計り、信仰運動が活潑化する17世紀は「宗教の世紀」とも呼ばれる。世俗のサロン、

社交界において女性が主導的な役割を果たすが、宗教界においても前世紀以前とは異なって女性の活潑な活動が見られる。

ジャンセニストとジェズイットとの論争は17世紀前半以来のものであるが、恩寵の問題をめぐるアウグスティヌス派とジェズイットとの論争の歴史は、16世紀中葉までさかのぼることができる。『プロヴァンシアルの手紙』はこの論争がその激しさにおいて、その頂点に達したところに位置を占めている。ジェズイットとジャンセニストとの間に恩寵に関する論争をむしかえさせた。ルーヴァン大学出身で、のちにその教授となったジャンセニウスは、1629年頃、恩寵問題に関するアウグスティヌスの複雑な思想を総合する大著作をなす計画を立てた。1638年、夭折したが、ジャンセニウスは、ついに『アウグスティヌス』を完成し、彼の死後、1640年、友人たちの手によってルーヴァンで出版された。この書物は恩寵に関する論争を再び引き起こし、そして、論争は初め、ルーヴァンで、ついでフランスへと拡がっていった。ジャンセニウスの『アウグスティヌス』はポール・ロワイヤル修道院の隠士たちのなかに強力な支持者を見出した。修道院長で、サン・シランと呼ばれていたジャン・デュヴェルジェ・ド・オーランスが、とりわけ、熱烈に支持した。サン・シランは『アウグスティヌス』を擁護することを、当時、まだソルボンヌの若い博士であり、隠士たちのうちで最も優秀であったアントワヌ・アルノーに当たらせた。

1643年、アルノーは『頻繁な聖体拝受について』を出版した。この著書はサン・シランの厳格な思想を忠実に擁護したものであり、ポール・ロワイヤル運動を宣明した最初の文書である。この書は悔悛の秘蹟と聖体の秘蹟に関する教説を叙述したもので、ジャンセニズムをフランスの民衆に知らせる上で大きな役割を果たした。1643年、『ジェズイットの倫理神学』という題名がつけられた小文書が匿名で出版された。アルノーはソルボンヌの博士で、これらの論争に精通していたフランソワ・アリエによって提供された資料を利用してこの文書を著述したのであった。ページ数は少なかったけれども、この文書は重要な意味を持っている。というのは、弛緩した道徳に対して、カト

リック内部からなされた、見事な、最初の攻撃だったからであり、また、『頻繁な聖体拝受について』と同様、フランス語で書かれており、サロンや教養ある男女に読まれたからである。これに対して、ジェズイットは反駁文書を出版し、また、ローマ教皇を後ろだてとし、枢機卿リシュリユーとも結びつき、アルノーとポール・ロワイヤル修道院を非難攻撃した。

ポール・ロワイヤルは極めて困難な局面に陥った。1656年1月14日、アルノーは事実問題で断罪され、さらに、法問題でも断罪されそうになった。この問題はソルボンヌだけでなく、多くのサロンでも教養ある人々によって議論されていた。ポール・ロワイヤルはサロンの人々に訴える作戦にでることになる。アルノーの文体は重厚すぎて、優雅ではなかったのも、彼はサロンの論争は苦手であった。「ここでは、彼の博学な文書は役に立たぬ表現になってしまう。…民衆はそんな文書を読まないだろう。」神学部入学資格者であった若いニコルも、やはり、民衆相手は得意ではなかった。アルノーは丁度その時、ポール・ロワイヤル・デ・シャンでパスカルに出会った。そこで、アルノーはパスカルに執筆を依頼したといわれる。

これに対して、ロジェ・デュ・シェーヌは「貴婦人に説明する神学」において、ジャンセニウスの『アウグスチヌス』出版以来、『プロヴァンシアルの手紙』(1656-1657年)を待つことなく、ジャンセニズムは民衆に働き掛けていたということを主張している<sup>38)</sup>。彼はジェズイットのラバン神父の『覚書』<sup>39)</sup>に依拠して、『頻繁な聖体拝受』がすでに社交界で成功していたことを次のように強調している。「だから、1643年に『アウグスティヌス』が現れてすぐ、パリには神学者にのみ委ねられていた主題に熱中する大勢の紳士、貴婦人がすでにいた。その頃、それまで知られていない精神的状況を意味する新たな現象が見られる。つまり、特別な教育を受けた少数の専門家にだけでなく、宗教論争はサロンや街に浸入した。それゆえ、しばしば繰り返されてきた、アルノーは神学者のみに語りかけることができ、パスカルは民衆

をひきつけるため、アルノーからリレーしたという考えは棄てなければならない。『プロヴァンシアルの手紙』を書き始める少なくとも10年前にアルノーは最も難しい問題を社交界の人々に語っていたとデュ・シェーヌは指摘している。

アウグスティヌス派の内部には、異なった流れがあった。ルシアン・ゴールドマンが「ジャンセニスト過激派」と呼ぶ人々、その代表は、サン・シランの甥、マルタン・ド・バルコスであるが、彼は社交界の人々とのあらゆる妥協を拒否した。彼らは論争がサロンや広場でなされることを認めなかった。バルコスは『プロヴァンシアルの手紙』の計画には反対であった。民衆の意見を得ることに対するこの反対は、同時に、民衆、社交界に対する批判的態度でもあった。バルコスにとっては、論争は専門家のものであり、「社交人」のものではなかった。社交界の人々にとっては、神学は「危険な気晴らし」に過ぎないバルコスにとってはポール・ロワイヤルが女性の支持を得ようと努力するのは正しいことではなかった。

逆に、ゴールドマンが「中道派」と呼ぶジャンセニスト(アルノー、ニコル、パスカル)は、善と真理を擁護するための最も有効な手段である限りは、「社交界」との何らかの妥協を認めた。彼らは女性に対して明らかに両義的な態度をとっている。彼らの著作から見ると、女性の支持を得ることと同時に、ジャンセニストのサロンの存在を容認しているように思えるし、女性が聖書や教父の書物を読むことを擁護している。しかしながら、「信仰宣誓文」への署名を拒否するポール・ロワイヤルの修道女を正当化するため、女性は論争を判断できないという予断にとどまっている<sup>40)</sup>。

いずれにしても、『プロヴァンシアルの手紙』は多くの教養ある民衆に読まれ、支持を得たのは、事実である。イエズス会のフランス管区長が次のような報告書をヴァチカンの本部に送ったほどである。「ジャンセニストたちはかつてのルターやカルヴァンの如くローマ教会の教皇に対して彼らの毒をまき散らす代わりに、イエズス会に歯向かってきた。彼らはイエズス会の道徳を中傷と嘲

38) DUCHÊNE Roger, *Impostures*.

39) Le B., P. RAPIN, *Mémoires*.

40) 森川 甫「近世フランス女性の教養へのアプローチ」(宮谷宣史編『性の意味』所収, pp. 250-252)

笑に満ちた彼らの手紙のなかで歪曲した。そして、これらの手紙は、非常に数多くまき散らされた。というのは、彼らは明らかに3ヵ月間に、様々な印刷機を用いて、約12万部の手紙を発行した。」

『プロヴァンシアルの手紙』執筆前に書いた『幾何学的精神』のなかで、パスカルは「説得術」を書いている。彼の説得術は「説き伏せる法」と「気に入る法」からなる。「説き伏せる法」は「完全に組織だった証明を行う術に他ならない」と述べ、「気に入る法」は、『説き伏せる法』とは比較にならぬほどに難しく、微妙をきわめ、また有用であって、すばらしいものである。したがって、私がそれを扱わないのは、自分にはその能力がないからである。また、自分とはとてもそんなことをするのに適した人間でははいと思うからである。』<sup>41</sup>この「気に入る術」が見事に開花したのは『プロヴァンシアルの手紙』である。パスカルは楽しみの原理を駆使して、恩寵と道徳という神学的問題をサロンの教養ある紳士、淑女にも提供したのである。ラパン神父が証言しているようにサロンの人々、教養ある男女民衆に神学問題を楽しんで論じさせ、パスカルはジャンセニストのなかでサロンの雰囲気にもっと近い表現法を駆使したと言えるであろう。

## 結び

16世紀、カトリック教会が女性を聖書から遠ざけていた時、福音的ユマニストや宗教改革者たちは女性に民衆語であるフランス語訳の聖書を提供し、聖書を読む道を開いたが、神学論争に参加することはすすめなかつたしや説教することは禁止した。トレントの公会議後のカトリックの教会刷新を経て迎えた「宗教の世紀」、17世紀には信仰運動が高揚し、社交界、サロンにおける女性の文化活動とともに、カトリック教会内部の女性の宗教活動は目覚ましい。聖書を読み、研究するだけでなく、神学論争にも強い関心を示している。ジャンセニズム、とりわけ、パスカルの『プロヴァンシアルの手紙』は女性の関心を神学論争に導くのに、多大の影響を与えたと言えるだろう。

## 主要参考文献

- Pascal (Blaises), *LETTRE A VN PROVINCIAL*, Edition princeps, 1656—1657.
- Les Provinciales ou les lettres écrites par Louis de Montalte un Provincial de ses amis et aux RR. PP. Jésuites, sur le sujet de la morale et de la politique de ces Pères.* Cologne, 1657.
- Les Provinciales*, Paris, Garnier, éd. de L. Cognet, 1954, 503, p. in-8°. (略号 PC.)
- Œuvres de Pascal* du MM. Léon Brunschvicg, Pierre Boutroux et Félix Gazier, tomes IV, V, VI, VII, in 8° (Paris, Hachette, *Les Grands Ecrivains de la France*, 1914—1926)を用いる。略号 GE.
- PASCAL (Blaise), *Œuvres complètes. de Blaise Pascal*, éd. de Seuil, 1963. (略号 OCL.)
- 『パスカル著作集』III, 教文館 (略号『P著作集』) 1980.
- 『メナール版 パスカル全集』I, II, 白水社 (略号『MP全集』) 1993—1994.
- Annæ Litteræ Provinciæ Frnciæ ad annum Christi 1656.*
- R.P. Rapin, *Mémoires*, II.
- TIMMERMANS (Linda), *L'accès des femmes à la culture (1598—1715)*, 1993, Champion, Paris. 937 p.
- DUCHÊNE (Roger), *IMPOSTURE LITTÉRAIRE DANS LES PROVINCIALES DE PASCAL*, UNIVERSITE DE PROVENCE, 1985.
- 森川 甫著『フランス・プロテスタントの苦難と栄光の歩み』聖恵授産所出版部, 1998.
- 森川 甫「近世フランス女性の教養へのアプローチ」(宮谷宣史編『性の意味—キリスト教の視点から』新教出版社, 1999.)
- MORIKAWA, Hajime, *Annæ Litteræ Provinciæ Frnciæ Ad annum Christi 1656* —パスカルの『プロヴァンシアルの手紙』に関連して—「社会学部紀要」第63号 関西学院大学 1991.
- Annæ Litteræ Provinciæ Frnciæ Ad annum Christi 1656, -concernant Les Lettres Provinciales de Blaise Pascal-*, *Etudes de Langue et Littérature Françaises* N° 60, 1992
- Annæ Litteræ Provinciæ Frnciæ Ad annum Christi 1656* とパスカルの『プロヴァンシアルの手紙』『ガリア』XXXI, 大阪大学フランス語フランス文学会 1992.

Pascal's *Les Lettres Provinciales*  
—Masterpiece in French Journalistic Literature—

**ABSTRACT**

Critics have said “*Les Lettres Provinciales* is a masterpiece of French journalistic literature”

Antoine Arnauld, doctor of la Sorbonne, Jansenist, was about to be condemned for heresy at the Faculty of Theology of the Sorbonne. This plot was laid by the Jesuits, who made up a majority of the Faculty. For the defense of Arnauld, Blaise Pascal wrote 18 Letters with the cooperation of Arnauld, Pierre Nicole and other Port-Royalists. He addressed these letters in French to ladies and gentlemen of Paris societies (salons), not to the clergymen, nor theologians, and the writers of the time reported that the letters were welcomed enthusiastically among the citizens.

Selon *Annuae Litterae Prouinciæ Franciæ ad annum Christi 1656* (*Annual Report of Jesus Society of France, 1656*) Eas autem tanto numero sparserunt, ut constet intra tres menses earum ad centum viginti millia exemplarium e diversis prælis prodiisse, quæ per emissarios suos, non per vniuersam Galliam modo, sed & in Angliam, Batauiam, Heluetios, Germaniam;... (A lot of those pamphlets were scattered; during three months, 120,000 examples were printed with various machines, and were sent not only throughout France, but also to England, Holland, Switzerland, Germany...)

**key words:** Pascal, *Les Provinciales*, journalistic literature